

## 差別——「私たち」が作り出すものとして

磯前順一、吉村智博、浅居明彦監修「シリーズ宗教と差別第一巻 差別の構造と国民国家——宗教と公共性」

磯前順一 国際日本文化研究センター教授

A5判・340頁  
法蔵館 2800円

本書は全四冊シリーズ「宗教と差別」の第一巻に当たる。一見相対立する性質を有する宗教と差別。宗教は苦しむ人々に救いを、差別は人々に理不尽な苦しみを与える。そういった意味で相容れないように見える両者の関係にこそ、公共圏を含む社会秩序の形成過程の秘密が隠されているという視点から、差別のメカニズムを解き明かそうとしたものである。

書評を書くにあたって、評者の立場を明らかにしておきたい。評者は本シリーズ全体の監修者にあたる。そし

て、零巻の執筆者でもある。自分の企画を自分で書評するのは読者にはいささか奇異に見えるだろうが、本書評では監修者の立場を生かして、本シリーズ全体がどのような目的のもとに企画され、第一巻がそれをどこまで達成し得たのか。そして、達成できなかったどのような点を、他の三冊が担おうとしているのかを示したいと思う。監修者ではあるが、第一巻の編者でも執筆者でもない立場から、そのずれを生かした書評を試みてみたい。

まず本シリーズの全体構造を示そう。第一巻にあたる本書は「差別の構造と国民国家——宗教と公共性」という題名のもと、国民国家の有する公共性という近代的性質における差別的特質を、まずは私たち現代人によって立つ認識地平を自覚するために取り扱う。第二巻にあたる『差別と宗教の日本史』では、日本の歴史をさかのぼることとで、こうした国民国家が作り出した近代的差別の形態が、時代とともにどのように変化してきたのかを、哲学者ニーチェの系譜学的な手法で近世、中

世さらには古代にまでさかのぼって探る。第一・二巻を通して、宗教学者のエリアーデ的な聖俗論と相通ずる網野善彦の無縁論もまた、それが一九八〇年代以降、日本の学問さらには読書界に与えた影響の大きさゆえに、しっかりと問い直されるべき対象となる。

そして、第三巻の『差別の地域史——渡辺村からみた日本社会』、および全体の総論にあたる零巻『きよみず物語——被差別信仰論』では、大坂の渡辺村界隈、および京都の清水寺界隈の宗教と差別をめぐる関係が、その地域固有の歴史を通して解き明かされていく。大坂では声聞師が、京都では犬神人が歴史の目立った存在となっており、その地域に果たす被差別民たちの形態は、地域によって異なることが示される。

全巻を通した宣伝文句として、「なぜ、私たちは差別するのか。宗教学、社会学、政治学、人類学、民俗学、歴史学など多角的立場から、固定化された差別観を覆し、宗教に内在する、秩序と差別の構造に迫る」を掲げる。監修者および編者のあいだでの討議から作られたこの文章には、執筆者たちの本シリーズへの思いが込められている。

要点は三点。ひとつは、差別は「あなたたち」が作ったものではなく、「私たち」が作ったものであるという認識から議論を始めること。もうひとつは、部落史という特殊視された研究分野内に議論を固定するのではなく、広く人文学一般のなかで、理論的および文献学的な成果をふんだんに取り込んで議論を展開すること。三番目に、

日常において不可視の形態をとるこの差別構造に光をあてることをこのシリーズの研究主題に据えること。そして、この差別をめぐる社会構造がその構成員を主体化する母体である以上、いかなる立場に身を置く者であれ、差別はまさに「私たち」の住む社会が当事者として産み落とした現象なのだという認識に達せざるを得ないと結論づけた。

この認識に立ったとき、「宗教と差別」というシリーズ名をもつ全四冊は、宗教もまた差別を生み出すシステムの一部であることを明確に踏まえたものとなる。それゆえに宗教は、みずからの鬼子である差別された者たちを救うというダブルバインド的な任務を負わされることになる。宗教は差別を作り出すとともに、その差別を救済し



ようとするねじれを有する言動——言  
表行為と身体実践——なのである。

この宗教の役割に対する現実的な認  
識は、評者のかかわってきた「宗教概  
念論」がもたらした理解の必然的な展  
開でもある。善にも悪にも一方的に還  
元しきれないところに、まさしく宗教  
が人間から生み出された営みであるゆ  
えんがある。同時に、人間から生まれ  
た宗教が、人間の有限性を超えてゆく  
点に宗教現象に超越性が仮託されるゆ  
えんもある。この自己撞着を抱え込ん  
だ主体のあり方を、精神分析家のジ  
クムント・フロイトは両義的  
(ambivalent)と名付け、ポストコロニ  
アルの英語文学者であるガヤトリ・ス  
ピヴァクはグレゴリー・ベイトソンに  
倣ってダブルバインド——宙づりにな  
った主体——と呼んだ。それはいずれ

も、主体が亀裂を負った分裂体である  
事態の異なる表現なのである。

さて、本シリーズの理論的な立場を  
明らかにしたうえで、第一巻「差別の  
構造と国民国家」に戻ろう。全四冊に  
おける、近代国民国家の一員として規  
定される私たちの認識および主体の基  
本様態そのものを公共性の観点から解  
き明かそうとする本巻は、二巻以降の  
各冊が、近代以前へさかのぼって差別  
の歴史的变化を解明する際の理論的な  
前提を担う。そこに、執筆者および読  
者の立つ認識の地平を対象化しようと  
する本書ならではの役割がある。  
その内訳は、以下の三部構成からな  
る。「第一部 差別と国民国家——理  
論的考察」、「第二部 差別と共生——  
世界の事例から」、「第三部 差別の構

造——近代日本の事例から」。その理  
論的骨子は、大村一真と川村寛文によ  
る序論「『聖なるもの』と『統治』の  
系譜」、および大村と菊田真司による  
「近代主権国家における排除と差別の  
論理——『公共圏』『統治』『聖なるも  
の』」、および菊田の終章「『差別』を  
超えて」の三本の論文によって示され  
る。さらに、そこに、近代以前の日本  
における差別の歴史(佐藤弘志、およ  
び現代のメディア社会におけるポピュ  
リズム論(川村)の観点から、「穢れ」  
と「情動」という分析の視点が補足さ  
れている。

監修者でもある評者の理解からすれ  
ば、本書の理論的前提には、世俗主義  
のメカニズム——世俗を公的領域に割  
り当て、宗教を私的領域に割り当てる  
こと——を批判的に吟味する宗教人類

学者タラル・アサドと、公共圏を(そ  
こからの)排除と(そこへの)包摂の場  
として捉える美学者のジオルジョ・ア  
ガンベン——この系譜に先行する先学  
として、ハンナ・アレントからユルゲ  
ン・ハーバマスに続く公共性論が念頭  
に置かれる——、そしてアサドを介し  
て宗教社会学者のエミール・デュルケ  
ム、プロテスタント神学者のルドル  
フ・オットー、宗教学者のミルチャ・  
エリアーデら宗教学研究の聖俗論が参照  
され、固有のかたちで重ね合わされる。  
この問題設定に対して、どのようにに  
各地域の、あるいは各時代の症例を用  
いて理解を深めていくのか、あるいは  
意義を提示していくのか。そこに第二  
部以降の各論の果たす役割がある。イ  
ンドのカースト(舟橋健太)、ディアス  
ボラとしてのユダヤ人(上村静)、フラ

察として目論まれている。

物を書く行為は怖い。建前ではどの  
ようなことを言っているにしても、書かれた  
テキスト自体がその書き手の価値観や  
生き方までを露わにしてしまう。それ  
が本シリーズにおいて、「あなたたち」  
の為す差別の告発——それはとりもな  
おさず、「私たち」という被差別者、  
あるいは無垢なる者を意味する——で  
はなく、「私たち」の為す差別の反省  
——法然や親鸞の言う悪人正因説、俗  
にいう悪人正機説の「悪人」——とい  
う問いの設定を行った理由である。差  
別を語る資格は、この一点に尽きる。  
本書はそんな差別論の前提条件を真摯  
に考えさせてくれる一冊である。後出  
する各冊による、課題の克服を監修者  
のひとりとしても肝に銘じたい。

ンスのイスラム移民(タラル・アサド)  
と障害者(寺戸淳子)。そして、以下、  
日本を例として、被差別部落(関口  
寛)、植民地民としてのアイヌ(平野克  
弥)、宗教的異能者(鈴木岩戸)、東日  
本大震災における被曝者(山本昭宏)。  
こうして地域のあるいは時代的なかた  
ちをとった差別の多様性が示される。  
差別をめぐる多様性は第一巻のみな  
らず、日本を例にとって第二巻以降に  
本格的に展開されていくのは、すでに  
紹介したとおりである。むしろ、多様  
性を指摘して事足りりとするような相  
対主義的な認識の獲得が本シリーズの  
目的ではない。その多様性の背後にあ  
る、近代において差別と呼び表されて  
きた諸現象を一貫して捉える原理的な  
視座と、差別をめぐる明瞭な定義の提  
示が、宗教史的考察を通じた理論的考